



青年の恋愛関係における嫉妬の経験と表出に関する研究

神野, 雄

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7071号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007071>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

(氏名 神野 雄 , No.2)

論文内容の要旨

氏名 神野 雄
専攻 人間発達専攻
指導教員氏名 谷 冬彦

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

青年の恋愛関係における嫉妬の経験と表出に関する研究

論文要旨

目的

日本の恋愛研究では嫉妬に関する体系的な研究はほとんど行われてこなかった。しかし海外では恋愛関係における嫉妬は個人や関係に対して破壊的な影響も建設的な影響も及ぼさるものとして、古くから研究・検討が行われてきている。本研究では特に嫉妬深さの個人差について捉えることが可能とされる、海外で支配的な社会心理学的観点から、嫉妬の経験・表出に関して検討を行うこととした。しかし海外の嫉妬の先行研究にも、解決されるべき課題や知見の不一致によって未だ検討され尽くしていない問題が複数存在する。そのため本博士論文では、先行研究の問題や課題を踏まえ、嫉妬の経験および嫉妬の表出について、測定する尺度の作成を行い、自尊感情や愛着、恋愛関係上の問題行動など、「嫉妬のプロセスが何によってもたらされ、何をもちょうるか」について実証的に検討することで、個人が恋愛関係上で示す嫉妬の意味について考察することを大きな目的とした。そのため、まず第1章では先行研究のレビューを行い、嫉妬研究の抱える課題や問題点について紹介し、本博士論文の問題意識と目的を明らかにした。続く第2章～第7章で9つの実証的研究を行い、最後の第8章で得られた知見についての考察・統合を行った。なお、本博士論文では実証的研究の調査協力者は全て大学生を対象とし、質問紙による調査でデータの収集を行った。

実証研究

第2章では、先行研究において特に今日の海外の嫉妬研究でも使われている嫉妬尺度の問題点に配慮して、多次元からなる信頼性および妥当性の確認された嫉妬尺度である「多次元恋愛関係嫉妬尺度」を作成した。下位尺度としては「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」を仮定し、探索的因子分析・確認的因子分析の結果から、仮定した3因子構造が妥当であることが明らかになった。「猜疑的認知」は親密な関係への第三者の侵入やパートナーの心変わりや疑う病的・妄想的過敏さ、「排他的感情」は「猜疑的認知」より幾分正当とされる、嫉妬喚起状況への否定的感情の強さ、「警戒行動」は関係の裏の第三者を警戒・詮索する度合いを示す。また α 係数も十分高かったため、内的整合性の観点からの信頼性には問題ないことがわかった。尺度の妥当性については、Mania項目群との関連において併存的妥当性が確認され、また多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度全てが見捨てられ不安尺度、再確認傾向尺度と正の関連が示さ

れたこと、そして「猜疑的認知」のみが親密性尺度と負の相関が得られたことから、構成概念的妥当性が確認された。

第3章では、嫉妬研究の黎明期に個人の嫉妬深さ・嫉妬傾向との関連が示唆されていた自尊感情との関連における知見の不一致について、知見の整理を行うことを試みた。第3章ではかねてから指摘されている一次元的な自尊感情の測定に関する問題点が嫉妬傾向との関連においても影響が及ぼされている可能性を考慮し、自己愛傾向を分析に用いることでその解決策となるかどうかを検討した。相関分析の結果、自尊感情は多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度とほぼ無関連を示した。さらに階層的重帰帰分析において、性別、自尊感情の次に自己愛の誇大性を投入したStep3において、多次元恋愛関係嫉妬尺度の全下位尺度が自己愛の「有能感・優越感」に正の影響を受け、「猜疑的認知」「排他的感情」に対しては「自尊感情」が負の影響を示したことが、先行研究の論争への一つの結論をもたらしたと考えられる。つまり第3章で想定した通り、一次元的な自尊感情の、自己愛の特に「有能感・優越感」と重複する部分を統制した場合には、自尊感情の高い個人ほど認知的・情動的な嫉妬傾向を示さない、ということが結果から示唆された。この結果から古典的な嫉妬研究に関する研究者たちの指摘は確かに正しい部分があったが、自尊感情や肯定的な自己評価の測定に際して上記のような自己愛的な部分を統制できていなかった場合が混在したために知見の混乱がもたらされた可能性が考えられるだろう。第3章ではさらに一次元的な自尊感情では測定しきれない自己評価の不安定な側面として、自己愛の過敏性に相当する変数や「注目・賞賛欲求」を階層的重帰帰分析に投入したところ、上記で観察されていた自己愛の「有能感・優越感」や自尊感情による有意な標準偏回帰係数の値が低減されたため、結局個人の嫉妬傾向を左右しやすい自己評価変数は、特に自己愛の過敏性や注目・賞賛欲求など、不安定な自己評価に関わる変数であることも明らかにされた。

第4章では、個人の親密な関係への満足感、関係満足感と嫉妬傾向との関連についても知見がさほど一貫していないことについて、本論文なりの結論を示すことを目的とした研究を行った。先行研究にて、嫉妬の認知的側面についてはおおむね一貫して関係満足感と負の関連を示していたという報告から、疑い深い個人が関係に不満になりがちなのは、パートナーの些細な行動を裏切りの予兆と考えてしまいがちで、関係に対する一種の学習性無力感にも似た状態に陥りがちであるために、結果として関係に不満な状態になるのではないかと考えられた。そのためそういった無力感とは正逆の「関係効力感」およびネガティブな事柄を繰り返し考え続けてしまう「ネガティブな反すう」傾向を考慮することで、嫉妬傾向と関係満足感が負の関係にあるとするプロセスを解明することを計画した。結果的に関係満足感と多次元恋愛関係嫉妬尺度の全ての下位尺度は相関分析では有意な関連が得られなかったが、「猜疑的認知」では「関係効力感」と有意な負の相関が示され、強制投入法による重回帰分析においても同様の結果が得られたため、ある程度想定したプロセスが実証的に確認できたといえる。また副産物として、相関分析ではほぼ無関連であったが、「関係満足感」に対する重回帰分析結果においては多次元恋愛関係嫉妬尺度の「排他的感情」が有意傾向の正の標準偏回帰係数を示していた。重回帰分析においては「ネガティブな反すう」傾向は「関係効力感」に対してはさほど影響を示さず、「ネガティブな反すうの統制不可能性」が有意な負の標準偏回帰係数を示していたため、個人の持つ関係に対する効力感「猜疑的認知」「ネガティブな反すうの統制不可能性」の2つの要因によって低減されることが示された。一方でこれらの結果についても、得られた係数は全て低めで、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度はさほど関係への満足感や効力感に対しても大きな影響力を持つ変数ではないことが示唆された。

(氏名 神野 雄 , No. 3)

第5章では、嫉妬の表出を測定可能とする尺度を開発すること、およびその測定する内容を詳細に検討することを目的とした。第5章第1節では先行研究の知見を統合し、葛藤に際した「攻撃」と「別れ」行動の弁別の必要性など先行研究の複数の問題点に配慮した尺度として、提示された自分のパートナーの浮気場面に対して個人がどのような行動を取ると予測するかを測定する尺度である架空の浮気場面への予測行動尺度 (Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity: ABSII) を作成し、その信頼性と妥当性を確認した。ABSIIは「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」の5下位尺度からなる。第5章第2節では既存の一般的なコーピング尺度との関連について探索的に検討し、ABSIIの測定する内容は一部を除き一般的なコーピングとは関連が薄いことを明らかにした。第5章第3節では、ABSIIに対する個人の反応を類型化して捉えることを試みた。その結果、「沈黙志向」は関係への執着の薄さ以外の動機によっても選択されうること、「別れ志向」「攻撃志向」の破壊的な行動と共に「沈黙志向」「ライバル志向」など、葛藤に際して行動を決めかねている群が見受けられることなどが明らかになった。

第6章では、「嫉妬が何によってもたらされるのか」を検討するため、愛着の観点から、個人の持つ愛着傾向が、多次元恋愛関係嫉妬尺度で測定される嫉妬傾向に及ぼす影響と、さらにこれらの愛着傾向と嫉妬傾向がABSIIで測定される各種の行動の予測に及ぼす影響について検討することを目的としていた。相関分析の結果では多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」は仮説通り、愛着の「両価」「回避」とは正の関連を示していた。「排他的感情」は「両価」とは有意な関連を示さなかったが、「猜疑的認知」と同様に「回避」とは正の関連を示した。「猜疑的認知」「排他的感情」はともに「安定」と負の関連が想定されていたが、これらの関連は有意とはならなかった。「警戒行動」は愛着とは無関連であった。ABSIIの各下位尺度に関しては、「沈黙志向」は「安定」と負の、「回避」「両価」とは正の関連を示し、その他には「対話志向」が「安定」と正の、「回避」「両価」と負の関連を示した。共分散構造分析の結果では、「沈黙志向」に対して引かれるパスの多さが目立ち、「回避」から直接的に正の、「安定」から直接的に負の、「回避」から「排他的感情」を介し負の、「両価」から「猜疑的認知」を介し正の影響を受けていることが確認された。これらの結果から、単純に多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度から「沈黙志向」を捉えた場合には「猜疑的認知」との関連が示唆されるのみであったが、愛着傾向を考慮に入れることにより、個人がパートナーに浮気されたと想定した際に「沈黙志向」的行動を取る背景には、多種多様な動機が存在しうることが考えられる。愛着の「両価」型特性が特に病理的とされる嫉妬傾向の「猜疑的認知」や「沈黙志向」と正の関連に、また「対話志向」と負の関連にあることを確認できたため、両価型の愛着傾向を持つ個人はやはり親密な対人関係をより良くすることを望みはしても、具体的な行動としてはどこか関係から逃避したり、関係を直接的には改善しないような心理的傾向に誘導されてしまう部分があることが本研究の結果からも確認できたといえよう。

第7章では、「嫉妬が何をもちたらずのか」を検討するため、人の実際の恋愛関係の中で生起している問題行動を「恋人支配行動」という観点から捉え、それらがどの程度、本論文で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度やABSIIによって説明されるか、交際期間や性別による影響も含めて、嫉妬の経験と表出という観点から検討することを目的としていた。結果から、「暴力的支配行動」に関しては、相関分析では多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」「警戒行動」と

(氏名 神野 雄 , No. 4)

の正の関連、ABSIIの下位尺度では「攻撃志向」「別れ志向」との正の関連、有意傾向で「対話志向」との負の関連がみられていた。階層的重帰帰分析に投入した場合、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度は全て「暴力的支配行動」を有意に説明していて、ABSIIの下位尺度では「攻撃志向」のみが有意な標準偏回帰係数を示した。特に「排他的感情」は相関分析では「暴力的支配行動」と無関連であったが、相手の裏切りに過剰に嫌悪感を抱く傾向は他の嫉妬の側面による影響が統制された場合にはむしろ暴力的な行動を抑制しうることが示唆されるような結果であった。また「暴力的支配行動」は男性において強く見られる傾向が示唆された。さらに、「束縛的支配行動」に関しては説明率の増加量からも、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度によって、特に「警戒行動」によって説明される部分が大きく、多次元恋愛関係嫉妬尺度の説明力に比べると、ABSIIの各下位尺度による説明率の増分は有意ではあったものの相対的に小さかった。また第7章の結果では2つの「恋人支配行動」のどちらにも交互作用項が有意となり、「暴力的支配行動」は、「性別」「攻撃志向」の交互作用項と「警戒行動」「沈黙志向」の交互作用項によって説明される部分が見られた。一方で「束縛的支配行動」に対しては、「性別」「交際期間」「性別」「別れ志向」「性別」「猜疑的認知」の間の交互作用項が有意となり、男女で束縛めいた支配行動がとられるメカニズムが少々異なる可能性が考えられた。まとめると、「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」のどちらに対しても、嫉妬の認知・行動的側面がどちらかといえばネガティブな影響力を示し、情動的側面がポジティブな方向の結果を示した点からも、嫉妬を多次元的に捉える利点は示されたといえよう。「束縛的支配行動」は特に性別の交互作用項によって説明される部分も見受けられたため、少なくとも今回用いた多次元恋愛関係嫉妬尺度やABSIIといった嫉妬に関する尺度を投入する場合は、単純な変数の主効果のみならず、人数を募った大規模調査による性別ごとの検討も必要であろうと考えられる。

総括

本論文では嫉妬の経験を測定しうる多次元恋愛関係嫉妬尺度、および嫉妬の表出を測定しうるABSIIを作成し、その信頼性と妥当性を確認した。このことは国内の嫉妬研究の基礎につながる点で意義があるだろう。また実証的検討から、嫉妬の経験に関しては、先行研究からの指摘とほぼ合致する形で、「猜疑的認知」は個人に対しても関係に対しても不適応的な変数と関連を示した。そのため、嫉妬の病理性や破壊的な側面はこの疑い深さにあることが本研究の結果からも考えられ、その根源は愛着の両価性に由来する部分があること、そしてこの傾向は各種の恋人を支配するような問題行動につながりうることが考えられる。「排他的感情」は「猜疑的認知」と正の関連にあるものの、重回帰分析的手法で互いに重複した部分を統制した場合には関係満足感の促進や暴力的な支配行動の抑制などにつながりうる点で、適応的な側面も持ち合わせる可能性が考えられる。「警戒行動」は他の2つの下位尺度と関連し、また束縛的な支配行動などを促進する結果を示していたため、こちらも具体的な個人の嫉妬に動機づけられた日常的な行動を測定する上では有用な下位尺度と考えられる。ABSIIの下位尺度では「攻撃志向」「別れ志向」で異なる関連のパターンが示されたことや、「沈黙志向」が、愛着の「回避」のみならず多様な要因に影響されうることを見出したこと、「対話志向」が安定した愛着によってもたらされ、関係上の暴力を抑制することを見出した点などに本研究の意義があるだろう。

(注) 3,000~6,000字 (1,000~2,000語) でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏名	神野 雄		
論文題目	青年の恋愛関係における嫉妬の経験と表出に関する研究		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	准教授	谷 冬彦
	副査	教授	河崎佳子
	副査	教授	吉田圭吾
	副査	准教授	伊藤俊樹
副査	准教授	相澤直樹	
要 旨			
<p>本論文の主目的は、青年が恋愛関係で示す嫉妬をどのように認知し、また処理するかという嫉妬の経験と表出の傾向が「何によってもたらされ、何をもたらすか」を心理学的観点より検討することであった。</p> <p>第1章では嫉妬に関する複数の理論的観点による研究知見と今なお残された課題について紹介することで、本論文の問題意識と目的、論文構成について述べた。</p> <p>第2章では第1章で行った議論を踏まえ、嫉妬の経験を測定する新たな嫉妬尺度として多次元恋愛関係嫉妬尺度を作成した。その結果、多次元恋愛関係嫉妬尺度は想定通り「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」の3因子構造を有することが示され、また十分な信頼性・妥当性を備えていることが確認された。</p> <p>第3章では、嫉妬研究の黎明期から続く自尊感情と嫉妬傾向との関連に関わる知見の不一致について、自己愛的観点から整理を試みた。その結果、誇大的な自己愛に関わる部分を統制した場合に、自尊感情が嫉妬の経験の「猜疑的認知」「排他的感情」に対し正の影響を示すことが明らかになった。</p> <p>第4章では、先行研究にて知見が一貫しない部分のある嫉妬傾向と関係満足感の関連について、関係効力感とネガティブな反すうを考慮することで、より詳細な検討を行った。その結果、仮説通りに「猜疑的認知」が関係効力感を低減するために、結果として嫉妬と関係満足感の間に関連がみられる可能性が示された。</p> <p>第5章では、嫉妬の表出を測定する尺度の開発と、測定内容の詳細な検討を目的とした。第5章第1節では先行研究の問題点を整理し、「攻撃志向」「沈黙志向」</p>			

「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」の5下位尺度からなる架空の浮気場面への予測行動尺度(Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity: ABSII)を作成し、信頼性と妥当性を確認した。第5章第2節では、ABSIIの下位尺度は一般的なコーピングとは関連が薄いことが明らかにされた。第5章第3節では、ABSIIに対する回答を類型化し、「沈黙志向」は単純にABSIIで提示される刺激を軽視する以外に、刺激への対応を決めかねている場合にも選択されることが示された。

第6章では、「嫉妬が何によってもたらされるのか」を検討するため、愛着傾向が嫉妬の経験と表出をどう規定しうるか、検討を行った。その結果、愛着の「両価」型特性が嫉妬傾向の「猜疑的認知」を促進し、愛着の「回避」「安定」型特性がABSIIの「沈黙志向」を促進しうることが明らかとなった。

第7章では、「嫉妬が何をもたらすのか」を検討するため、恋愛関係の中で生起する恋人支配行動がどの程度、嫉妬の経験や表出に説明されるか、検討した。その結果、暴力的な支配行動は嫉妬の「猜疑的認知」やABSIIの「攻撃志向」によって促進され、「排他的感情」によって抑制され、男性で強く見られること、束縛的な支配行動は嫉妬の「猜疑的認知」「警戒行動」、ABSIIの「別れ志向」によって促進され、性別に関わる交互作用項により説明されることが明らかになった。

最後に、第8章では、各研究を通じた全体的討論を行うとともに、残された課題について述べた。

これまで海外では恋愛関係における嫉妬は個人や関係に対して破壊的な影響も建設的な影響も及ぼしうるものとして、古くから研究・検討が行われてきている。しかしながら、日本の恋愛研究では嫉妬に関する体系的な研究はほとんど行われていなかった。その意味において、嫉妬に関して体系的に研究した本研究は、きわめて独創的な研究であると評価できる。また、海外の研究でも明らかにされていなかった多くの点について明らかにしており、その意味においても、非常に独創的かつオリジナリティーの高い研究であると評価できることを確認した。また、精緻な測定尺度を新たに作成した上で、実証的に研究を行っていることも評価できる。さらに、階層的重回帰分析や共分散構造分析など、高度な統計手法を使用した緻密な分析を行って、実証的な研究知見を明らかにしていることも評価できよう。本研究は青年の恋愛関係における嫉妬について、その経験と表出に関わる様々な要因を研究したものであり、青年心理学、人格心理学、社会心理学等の心理学諸領域について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者の神野雄は、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。

なお学位申請者は、本論文に関わる下記の査読付き学術論文を4編発表しており、博士学位申請の基本的要件を満たしている。

神野 雄 (2017). 架空の浮気場面への予測行動尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究、26、140-153.

神野 雄 (2016). 多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究、25、86-88.

神野 雄 (2015). 嫉妬研究の概観と展望 神戸大学発達・臨床心理学研究、14、18-28.

神野 雄 (2013). 青年の恋愛関係における認知的な嫉妬に関する一研究 神戸大学発達・臨床心理学研究、12、32-39.